

機関番号：3 2 6 3 0

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2010

課題番号：2 0 5 2 0 1 3 1

研究課題名(和文) 多メディアにおける「らしさ」の変容
表象文化にとって「自然さ」とは何か研究課題名(英文) Changes of “verisimilitude” or “likeness” in multimedia conditions:
what is the “naturalness” for cultures of representations.

研究代表者

北山 研二 (KITAYAMA KENJI)

成城大学・文芸学部・教授

研究者番号：9 0 1 4 3 1 3 0

研究成果の概要（和文）：本研究は、「らしさ」の概念を中核とする表象の問題（表現することと現れることの関係性）に関して、理論研究と実証事例研究を交差させて、国際シンポジウム、研究会、調査を実施しながら討論を重ねた。理論研究次元では、存在と現象、自然と文化、一般性と個別性という哲学的対立概念を表象次元で交錯させる「らしさ」の位置づけについて包括的な考察をした。実証研究次元では、社会心理学的事例研究によって、情報社会における事件と事件らしさ、ニュースとニュースらしさの相互関連性が実証された。文学的事例研究によって、演劇では真実らしい人物造型が重要であること、また地方色を出す文学が現地事情よりは文化的コード（らしさ）によって形成されること、さらに美術的事例研究によって、実物（真なるもの）より表象性（真らしきもの）が問題であることが、論証された。映画的事例研究によっては、「自然さ」の文法「真らしさ」が映画のリアリティーであるだけでなく、その多くが身体的反射性に由来することが確認された。さらに歴史テレビ映画や写真映画の事例研究によって、「真なるもの」と「真らしきもの」の明快な判別ができないことも証明された。文化論的事例研究つまり文化としてのらしさの研究では、それぞれの「らしさ」が文化的多層性の産物であり、その反映であるはずの実物（真なるもの）を特定できないことが確認された。こうして本研究の目的、「らしさ」という概念を軸に、表象文化の成立と変遷を「自然」の成立との交替として捉え直し、近現代の表象文化の諸展開について具体的・包括的な見取り図をつくることは、おおむね達成された。

研究成果の概要（英文）：Our research project team treated the problem of representations, of which the focal point is “verisimilitude” or “likeness”(relations between expression and appearance or phenomenon). We approached this problem from two perspectives, one theoretical, and the other exemplary. In these perspectives we organized one international symposium, several research meetings, and two field works, and made many long and lively discussions on each occasion. In theoretical researches, we treated as comprehensively as possible the problem of where to place and how to evaluate “verisimilitude” or “likeness,” by thinking how contrastive or opponent philosophical concepts such as beings and phenomena, nature and culture, and generality and particularity, are intertwined on the dimension of representations. In exemplary researches, we showed by socio-psychological case studies that in information societies news and news-likeness, or events (cases) and event (case)-likeness are closely interdependent. We demonstrated by literary case studies that in theater formation of characters depends much more on “verisimilitude” or “likeness” than on truth, and that when literary works focus on characteristics of some regions or districts, cultural codes plays much greater roles than the real situations of those regions or districts. Moreover, our team clarified by research of fine arts that what really matters in that field is

not truth (life) but representativeness (appearing to be true). Further on, by analyses of movies, we ascertained that what forms “verisimilitude” or “likeness” there, is not only the grammar of “naturalness” but also the physical reflexes of human bodies. By analyses of historical movies made for TV and of photo-movies, we proved that it is impossible to distinguish definitely “being true” from “appearing true.” Through researches concerning “verisimilitude” or “likeness” in cultural contexts or customs, we made it clear that each cultural “verisimilitude” or “likeness” is a product of multiple and complicated cultural factors and that no single origin of such “verisimilitude” or “likeness” (the truth reflected in such representation) can be delineated. In these ways, we mostly accomplished the objective of our project, that is, concrete and comprehensive reconsiderations of the developments of the modern and contemporary cultures of representations from the perspective of “verisimilitude” or “likeness,” rethinking the birth and the changes of cultures of representations as formations and changes of “naturalness.”

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2009年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：芸術学、芸術学・芸術史・芸術一般

キーワード：らしさ、自然、リアリティー、表象、物語、メディア、風景、アイデンティティー

1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究には、これと密接に関連する前研究、「なぜ人々は物語なしに生きていけないのか 多メディアの中の物語の発生・展開・終焉」(基盤研究(C)平成16-18年度)が前提としてあった。前研究では、その問いに答えるべく、物語が多メディアにおいても人々の生の現実との複雑な連関の中で存立するその仕方を具体的に分析・解明し、物語と生との本質的な関係性を確認した。そして、この関係性の最も要素的な形式として抽出されたのは、物語が生を表象し生が物語を表象するという、物語と生との相互的表象関係であるのだが、それにとどまらず文化一般・制度一般の存立にも関わるある根本的な問い、表象の「真正さ」あるいは「リアリティー」に関する問いに直面することになった。そこで表象するものと表象されるものとの限りない多様性にあっても、真正さの一定の階梯が設定されるのは、表象の正統化の機制であることが分かった。そうであれば、表象するものがその根拠としての表象されるものに準拠して自らの真正さの保証を得

る、という表象に本質的な正統化の働きの実際を詳らかにすることが必要になった。そこで、正統化を成就する表象の基本的な特徴として、含みの豊かな和語「らしさ」を主題の目印として立て、諸メディアにおける多様な「らしさ」の存立を分析することになった。(2) 「らしさ」というキーワードは、本研究の探究主題を巧みに要約する言葉であるだけでなく、それが先行諸研究や学問的文脈に関連して持つ次の二つの利点を持つ。一つは、たんに特定の「らしさ」には限定されない「らしさ」全般についての本格的で多分野に跨る本研究は、先例のない独自のものでありながら、本研究が利用しうる関連研究や包摂しうる関連主題は実に豊富であるということだ。表象に関わる数多くの議論は、古くはアリストテレス以来のミメシス論の文脈、新しくは20世紀後半の現代思想における表象批判等(フーコー、デリダ、ドゥルーズ等)が、本研究にとっては、研究対象ともなりうる豊かな先行研究として与えられている。もう一つは、「らしさ」は「自然」という大きなテーマを呼び込むので、本研究

を「自然」に関わる諸研究および「自然と文化」という伝統的かつ根本的な問題設定の文脈にのせられるということ。すなわち、「らしい」とは、その表象が参照する何らかの本源的なものに照らして「自然な」ということでもあり、このとき、参照される本源的なものは広義の「自然」として概念化されうる。逆に、「自然」の表象ということを広く考えれば、それは「自然」を表象しつつ自らも表象する「第二の自然」としての「文化」のことだとも言えよう。本研究にとって資源となりうる先行研究は、「文化」における「自然」の表象に関わる諸研究であり、具体的には、「風景」概念の文化的形成をめぐる研究、文学や映画における「自然さ」の演出技法についての研究、美術における図像とその「それらしさ」をめぐる図像の歴史についての研究、思想史における「自然」概念の変遷についての研究等が挙げられる。

(3) 本研究のテーマに関わる諸事象については、個々の領域における専門的な諸研究は豊富ではあるが、諸研究が生産的な仕方では交差・重畳しあうことを可能にするような領域横断的・多層的な研究はほとんどなされていないため、哲学・文学・美学芸術論・社会心理学といった領域を超えた研究チームを作らねばならなかった。

2. 研究の目的

(1) 本研究は、「らしさ」という概念を軸に、表象文化の成立と変遷を「自然」の設立と交替として捉え直し、近現代の表象文化の諸展開について具体的・包括的な見取り図をつくることを目的とする。「らしさ」とは表象一般の本質に含まれる正統化する表象性のことであり、「自然」とはその正統化の根拠となつて表象に「自然さ＝らしさ」を与えるもののことである。表象の「らしさ」を中心として配分される実詞的また形容詞的な諸々の「自然」の布置が、リアリティーと説得力を持った特定の表象の体制を成立させる。本研究は、一方では事例的・実証的に、このような表象の政治学・技術論・系譜学・変動論を、演劇、小説、絵画、写真、映画等の近現代の諸種の芸術表現や諸メディアにおける私的公的な自己表現のなかに探り、他方では理論的に、「らしさ」を中心に置いた表象の一般理論を有力な諸理論の捉え直しを通じて練り上げることによって、最終的に我々の表象＝文化の全体的骨格を透視することを狙うものである。

(2) 実証的・事例的研究 17-18 世紀のフランスの演劇における「真実らしさ」の研究

究。当時の演劇理論において真実に優位するとされた「真実らしさ」における「真実」と「らしさ」との位置関係を分析しながら、「らしさ」的なものの若干の本質を明らかにする。

ルネサンス以後における対象のミメシス的表現とされる絵画芸術さらには写真映像のリアリティーの変容についての研究。対象のミメシス的表現の普及によるリアリティーの変化とそれが視覚芸術一般に及ぼした効果とを考察することを通じて、映像の過剰さによって規定された現代的なリアリティーの基本的な枠組を明確にする。20 世紀の映画芸術における「自然さ」の文法についての研究。ハリウッド映画等において認められる、一面ではきわめて不自然な演技や場面の展開を「自然なもの」と見せかける技法の詳細な分析を通じて、捏造されるものとしての「自然」の逆説的な在り方を照射する。

西洋思想における「自然」概念の変遷についての研究。特に、近代的自然概念の抱える諸困難と、たんに思想レベルではなく知覚レベルでの変容を伴った「風景」概念の成立の経緯に着目しながら、西洋思想における「自然」概念の諸類型を括り出し、人間にとっての「自然」の基本的な位置づけをその多様性ととも解明する。現代の情報社会における「自分らしさ」と「自然志向」についての研究。文化が病んだ過剰さとして理解される現代社会において、「ありのまま」の自然を求める一般的な傾向があり、それが孤立した個人の物語への欲望と連繋して一つの神話を形成しているように思われる。調査に基づきながらこの神話の構造を解明する。

(3) 次に理論的研究 現代社会・文化についての具体的かつ一般的なヴィジョンの形成を試みるのだが、前述の実証的・事例的諸研究の成果をとりまとめるとともに、現代の表象文化論の諸成果をも組み込んで、近現代における表象文化の諸体制の成立・展開・変容と、それを背景にした現代の我々の表象文化の基本的な骨組みとを、包括的に描き直す。以上の諸研究の前提となる理論的枠組みも、前述の諸研究の成果から抽象された普遍的構図としても位置づけられるような、「らしさ」の一般理論の構築の試み。特に、20 世紀における表象理論・表象研究を有力な道具立てとして参照しながら、諸々の「自然」を配分する「らしさ」のダイナミズムとしての表象作用の本質とその諸様態を、我々の「文化」一般の中核をなすものとして理論的に明確化し、整理する。

3. 研究の方法

(1) 初年度は、理論的検討および事例的・実証的研究を実施するための準備期間とした。まず、理論的検討のために、「らしさ」についての原理的考察を行ない、「らしさ」の概念を中核とする表象についての仮説的な理論の構築を行なう。最終的な理論構築は本研究全体の数年にわたる展開を待ってはじめて可能になるはずのものであるが、実際に近現代の表象文化の個別的事例に取り組みはじめるに当たって、少なくとも作業仮説として全体を包括的に見通すための視点が必要になるし、したがって原理的考察でもある。「文化」の成立は「表象」の成立とほぼ等しく、それ故に「文化」は「表象文化」でもあるのだが、その「表象」の本質契機と目されるのが、この研究グループが考える「らしさ」である。「研究の目的」で既述したように「らしさ」をこの用語で主題化した本格的な研究は存在しないが、問題圏としては表象の問題一般に関わっており、特に、20世紀後半に展開された表象批判・表象理論から多くの示唆を得ることができる。それらの著作で行なっている記号と経験とに関わる形而上学一般の批判、などを吟味・検討しつつ、近現代の表象文化の諸体制および表象一般における「らしさ」の構造について、本研究における作業仮説的な理論の構築を試みる。

(2) またこの理論的検討のもう半分となる「自然」の最初の原理的考察として、村瀬を中心として、特に哲学的な「自然」概念の検討を行なう。「らしさ」という形容詞的・副詞的なニュアンスの概念と、「自然」という実詞的なニュアンスの概念との両極を押しやることで、具体的諸事例を浮動する多層的な「自然さ」の領域として位置づけることが可能になると見込まれる。題材および先行研究としては潜在的には「自然」をめぐる哲学史全体が用いられうるが、「自然」概念の変遷についての批判的・哲学的考察が、ここでの重要な参照項となる。特に、メルロ＝ポンティの考察によれば、現代の我々の「自然」概念は近代の二元論に規定されたもので、そこでは「自然」は対象として我々自身の外に表象される死せる自然でしかないが、このような概念のもとでは、我々自身の本性と不可分で文化そのものとも識別不可能な産出性としての自然観が抑圧されている。文化と無縁な生の自然も、自然と無縁な精神性としての文化も、本来はありえない。このような見地を立脚点としながら、「自然」諸概念の可能的生成の構図の描出を試みる。

(3) これらの理論的検討と平行して、研究メンバーのうち、主に北山、一之瀬、川上、木

村が実証的研究の可能性を検討する。現代社会の諸側面、諸レベルで展開している「らしさ」を分析対象とする。美術・写真表現、演劇表現、映画表現、さらにはテレビ表現における「自然の成立」と「第二の自然」を現実の映像などを通して、実証的な分析を行うことが可能か、可能だとしたらどのような方法によって実現するのかを検討する。

(4) 初年度は予備調査期間として各種研究会や現地調査を、次年度はその具体的応用実施期間として国際シンポジウムを含む各種研究会や現地調査を、最終年度はそれらの成果を分析し公表する準備のための研究会等を開く。研究期間を通して、研究遂行に必要な備品の整備とともに、現代社会における関連する各種のメディア内表現の収集を行う。それぞれの研究分担者にとっては、マスメディアにおける事例の収集、あるいは文学・美術・映画・演劇における問題事例の検証、さらに、個人の社会心理レベルにおける「自然らしさ」の収集を実施し、分析カテゴリーの設計後に必要な映像分析、内容分析を行う。その際、北山は自画像における「自分らしさ」と「自分」の関係について、一之瀬は17-18世紀のフランスの演劇における「真実らしさ」について、木村は20世紀の映画芸術における「自然さ」の文法について、川上は、現代の情報社会における「自分らしさ志向」と「自然志向」について、最初の基本的な研究像としてそれぞれ設定した上で、各種メディア固有の問題と共通の問題とを整理し、実証的研究全体の構図を確定していく。

(5) 国際シンポジウムを含む各種研究会については、研究分担者の関連分野に密接に関係する研究者を招聘して実施し、研究会や現地調査については、「文化」と「自然」を横断する文化論的視座から行うが、従来の研究と「らしさ」の研究の配置や関連性・差異性を明確化することとする。

4. 研究成果

(1) 初年度（平成20年度）は、理論的検討のために、「らしさ」と「自然」についての原理的考察を行ない、「らしさ」の概念を中核とする表象についての仮説的な理論の構築の基礎を築いた。また、その実効性の検証とその理論的練り直しをすべく、日本映画における自然らしさの実証的研究を、建築家・東北大学准教授の五十嵐太郎氏を招聘し「結婚式教会」における演劇的社会心理学的表象的效果としての「結婚式らしさ」の研究を、骨董研究家・成城学園教育研究所の青柳恵介氏を招聘し陶器骨董における本物と偽物の

境界線の曖昧さ(「ほんものらしさ」)の研究を、成城大学准教授の木下誠氏を招聘し、映画における「イギリスらしさ」の研究を行った。それぞれ口頭発表と討議をへて十分な成果を確認した。そして、ヨーロッパらしさとアラブ・チュニジアらしさの重層性と相互作用を調査するためにチュニジアにて現地調査を実施し成果の質的充実を追認した。文化間における「らしさ」のありようが文化の多層性と交錯することも確認された。

(2) 次年度(平成 21 年度)は、さらなる実証的研究のために、放送大学大阪学習センター長(大阪大学名誉教授)の柏木隆雄氏を研究会に招聘し、19 世紀文学における「らしさ」の典型事例としてメリメ、バルザック、モーパッサンの短編を巡って抽出できる「コルシカらしさ」の表現の研究を行った。現地の実情とは切り離された文化的コードから生まれる「らしさ」のこうした事例研究は、原理的に理論研究としての表象研究と共有するものが多いことが確認された。その後、理論研究と事例研究とを双方向的に統合する研究を構築すべく、パリ第一大学教授のドミニク・シャトー教授(美学・映画学研究)と国立科学研究センター主任研究員レーモン・ベルール氏(映画学)を、また若手研究者の河合大介氏(成城大学、美学)、小河原あや氏(成城大学、映画学)、深川一之氏(一橋大学、アニメーション研究)を招聘し、二日間にわたる国際シンポジウムを開催した。河合氏の報告によってミニマル・アートは美術史の終焉を告げることで「真なるもの」の基準が失効することが、シャトー氏の報告によってポストモダンの歴史テレビ映画は「真なるもの」と「真らしきもの」を競合的に取り込む事例から「真なるもの」と「真らしきもの」は明快には括り出せないという理論的提言が、村瀬の報告によって「らしさ」の概念はその射程を検討することで「現れるもの・現出」と「在るもの・存在」という哲学的対立概念との相関性が確認されることが、また、小河原氏の報告によってリヴェットの映画『地に落ちた愛』はアクチュアルとヴァーチャルが映像においては「らしさ」を越えて「生」のリアリティーとして受容されることが、深川氏の報告によってアニメーション映画の「本当らしさの表現」はわれわれの身体感覚の反射的投影に支えられていることが、ベルール氏の報告によってダヴィッド・クレルボの『幸せな瞬間の諸断面』は映画と写真を区別するものを探求しながら、「真なるもの」と「真らしきもの」の問題系を編み込むことが、40 名ほどの参加者との精力的な討議

の結果、確認された。その後、本研究は欧米系の事例研究に留まるべきではないという趣旨にそって、歴史的に「台湾らしさ」、「中国らしさ」、「日本らしさ」が競合してきた台湾を事例研究の有力な一例として現地調査を行った。淡江大学外語学院日本語文学系副教授兼主任の彭春陽氏から多くの台湾と日本の比較文化論的事情を、日本と関係が深い貿易会社の社長施智華氏、中華電信股份有限公司の張至誠氏やその父親(公務員とその後のレストラン経営者)から「台湾らしさ」や「日本らしさ」が織りなすライフヒストリーを、観光地九份では観光地の新しい「らしさ」の誕生を教えてもらい、淡江大学外語学院日本語文学系の大学院生とはジャポニズムという「日本らしさ」の美学の形成事情について、淡江大学外語学院日本語文学系学生、観光ガイドコースの学生とは観光のガイドの「らしさ」について意見交換を行った。改めて異文化間における「らしさ」のありようが文化の多層性(歴史性、地域性、政治経済性等々)と複雑に交錯することも確認された。

(3) 最終年度(平成 22 年度)は、本研究会の総括のために理論的研究と実証的事例研究の相互参照をしながら、意見交換や討論を繰り返し行った。とくに、らしさと自然さが重層化する事例として、木村が古典的ハリウッド映画における「自然さ」を検証すべく、ヒッチコック『裏窓』(1954)の冒頭場面を分析考察した。これはいかにらしさが自然さを装うことで受容されたかを証明するものであった。さらに、いかにして異文化間における「らしさ」のありようが文化の多層性と複雑に交錯するかを考察するために、大阪大学の北村卓教授を招聘して、宝塚歌劇におけるフランスらしさ/日本らしさの研究を行い、それが文化の歴史性、地域性、政治性、経済性等々の産物であることが確認された。

(4) 本研究会は、この3年間の研究成果として総括的報告書を作成するにあたり、あらためて研究目的を確認し、さまざまな研究会・レクチャー・国際シンポジウム・現地調査・討論会を再点検して、それぞれ研究分担者、研究協力者に成果を報告するよう依頼して報告書『多メディアにおける「らしさ」の受容 表象文化にとって「自然さ」とは何か』(194 頁、2011 年 3 月)を公刊した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 12 件)

北山研二・吉田裕、芸術からアートへ：アートの公益性をめぐって、AZUR、12号、2011、pp.1-18、査読有。

北山研二、アントナン・アルトの自画像または他者の風景の解体、ヨーロッパ文化研究、第30集、2011、pp. 54-78、査読無。

一之瀬正興、ドン・ジュアン劇の登場人物の塑造、ヨーロッパ文化研究、第30集、2011、pp.5-27、査読無。

北山研二、Qu est-ce que le japonisme ? --- Le japonisme était-il une révolution esthétique ou un commencement de la mondialisation esthétique ?, ヨーロッパ文化研究、第 29 集、2010、pp.63-95、査読無。

川上善郎・川浦康至、新型インフルはどのように語られたのか、コミュニケーション紀要、第 21 輯、2010、pp.35-59、査読無。

村瀬鋼、「らしさ」概念の射程、ヨーロッパ文化研究、第 29 集、2010、pp.97 108、査読無。

村瀬鋼、想像力と共感 可能的なものの実在について、哲学会編 哲学雑誌、第 125 巻第 797 号『想像力・共感』、2010、pp.59 77、査読有。

北山研二、写真または他者の映像、ヨーロッパ文化研究、第 28 集、2009、pp.32-76、査読無。

川浦康至・川上善郎、オバマ当選ニュース伝播に関する学生調査、コミュニケーション科学、第 30 号、2009、pp.47-65、査読有。

北山研二、Marcel Duchamp avec sa pensée du dehors、成城文藝、第 202 号、2008、pp.45-75、査読有。

北山研二、Voir, entendre, sentir et imaginer chez Marcel Duchamp --- le visible avec l invisible、ヨーロッパ文化研究、第 27 集、2008、pp.73-122、査読無。

村瀬鋼、心身問題と他者問題との関係について レヴィナスの身体論から、西日本哲学会編 西日本哲学年報、第 16 号、2008、pp.37 53、査読有。

〔学会発表〕(計 3 件)

川上善郎・川浦康至・高橋尚也、心の中のパッサージュ 商店街の社会心理学的機能、日本社会心理学会第 50 回大会発表、大阪大学、2009 年 10 月。

岡山慶子・川上善郎、他、容貌に関するサポートが乳がん患者を中心とした女性が

ん患者の心の変化に及ぼす影響、第 17 回日本乳癌学会学術総会発表、ホテル日航東京、2009 年 7 月。

川上善郎・川浦康至・柴内康文、就職活動における社会的リアリティの形成過程(2) 人生におけるターニングポイントでのインターネットの働き、日本社会心理学会第 49 回大会発表、鹿児島大学、2008 年 11 月。

〔図書〕(計 4 件)

北山研二、他、危機のなかの文学 今、なぜ、文学か?、水声社、2010、274。

檜垣立哉・村瀬鋼、哲学という地図 松永哲学を読む、勁草書房、2010、244。

松永澄夫・村瀬鋼(編)『哲学への誘い II 哲学の振る舞い』、東信堂、2010、262。

川上善郎、雑談力 おしゃべり・雑談のおそるべき効果、毎日コミュニケーションズ、2008、205。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

北山 研二 (KITAYAMA KENJI)
成城大学・文芸学部・教授
研究者番号：90143130

(2) 研究分担者

一之瀬 正興 (ICHINOSE MASAOKI)
成城大学・文芸学部・教授
研究者番号：40003462
川上 善郎 (KAWAKAMI YOSHIRO)
成城大学・文芸学部・教授
研究者番号：00146268
村瀬 鋼 (MURASE KO)
成城大学・文芸学部・教授
研究者番号：60279247
木村 建哉 (KIMURA TATSUYA)
成城大学・文芸学部・専任講師
研究者番号：10313181